創業110年のナノテク企業

微粒子技術に磨きをかけて

アシザワ・ファインテック 次代に挑む

アシザワ・ファインテックが今年、創業110年を迎える。老舗企業ゆえの古い体質から決別するため、2003年、主力である機械事業を、前身の会社から引き継いで独立。在籍していた全従業員をいったん解雇し、本人らの意思で再入社してもらい、新創業を果たした。それから10年。微粉砕・分散機「ビーズミル」の専業メーカーとして見事に息を吹き返し、ナノテクノロジーを支える微粒子技術を追求し続けている。ニッチ市場で存在感を発揮するアシザワ・ファインテックの今と、これからを追った。

若手が老舗を支える

アシザワ・ファインテックのビーズミルは、粉体の粒子径をマイクロメートル（マイクロは10万分の1）や、ナノメートル（ナノは10億分の1）レベルにする微粉砕・分散機。粒子の結晶構造や特性を損なわずに微細化できる〝マイルド分散〟技術を確立した。

顔料を細かくして鮮やかな色彩を追求するインクや化粧品業界、高価な原料を粉砕して少量で高い有効性を求める医薬品業界など―。ナノテクノロジーが産業発展に資する今日、同社のビーズミルは高い評価を得て、幅広い業種で支持されている。

本社工場（千葉県習志野市）

千葉県習志野市にある本社工場。現場ではビーズミルの機構や使用条件などについて若い技術者が意見を交わしている。社員一人ひとりが、自らのアイデアと行動力で顧客に応えるマインド、つまり「ベンチャー魂」を存分に発揮している。

この10年で従業員の構成は大きく変化した。従業員の平均年齢が37歳の若い会社に生まれ変わった。女性社員は全体の約3割を占め、主要な部門で活躍している。新会社に入社した大卒男子従業員の82％が現在も在籍するなど定着率は高い。

だが、設立当初のアシザワ・ファインテックは今とはかけ離れた組織だった。

自主開発の湿式ビーズミル「MAX ナノ・ゲッター」

100年目の新創業

アシザワ・ファインテックの前身、アシザワは四代にわたって歴史を刻んできた。創業は明治時代の東京・月島。関東大震災と東京大空襲で、工場や書類の大半を消失したが復興した。当時は製缶業として海外メーカーの下請け仕事が中心だった。現在のような製品メーカーへと事業転換を成し遂げたのが、三代目社長の芦澤直仁氏（現会長）だ。1984年（昭59）に独ネッチ社と提携。ビーズミルの製造販売に参入し、今日の基礎を築いた。

だが、長期にわたって、事業は赤字すれすれだった。社内に開発部門がないばかりか、営業力や品質管理力も乏しく「技術水準の高い国内ユーザーの要望に、満足に応えられない状態だった」ことが原因だった。

創業100周年を控えて、2000年に就任した息子の芦澤直太郎社長は会社存亡に強い危機感を抱いた。

「今のままでは会社がつぶれる。その前に、創業時の気概を取り戻して、社員とともに会社を蘇生させなければならない」。芦澤社長は、創業者で曾祖父の仁吾氏の姿勢を想像した。仁吾氏は当時最先端の技術を要した蒸気機関車の製造に挑むなど、今で言うベンチャー魂で次代にバトンをつないだ。

「この歴史の節目は、次の100年を目指して再出発する唯一無二の好機だ」（芦澤社長）。都内にある倉庫の賃貸を副業とするアシザワから、あえて本業の機械事業を切り離し、不退転の決意で真の機械メーカーへの変身を目指した。

分社から2年後。思いは形になって現れた。初の自社開発品、湿式ビーズミル「ナノ・ゲッター」を世に送り出した。以降、小型実験機から大量生産型まで製品サイズを拡充、医薬原体向けや液体を介さない機種も開発するなど、粉砕機メーカーとしての総合力を高めている。

技術開発だけでなく、現場への権限委譲や若手の登用をはじめとする社内改革を断行。社員自らが考え、アイデアを提案できる土壌をつくってきた。その結果、顧客のもとに24時間以内に駆けつけるアフターサービス体制を構築するなど、社員が発案した事業がいくつも具体化している。

07年に始めた微粒子の受託加工事業も順調だ。単なる機械メーカーとしてではなく、新素材の粉砕・分散を必要とするユーザーに対する微粒子技術の総合コンサルタントを目指している。

新たな羅針盤

次の100年を見据えて―。アシザワ・ファインテックは新たな一矢も放つ。

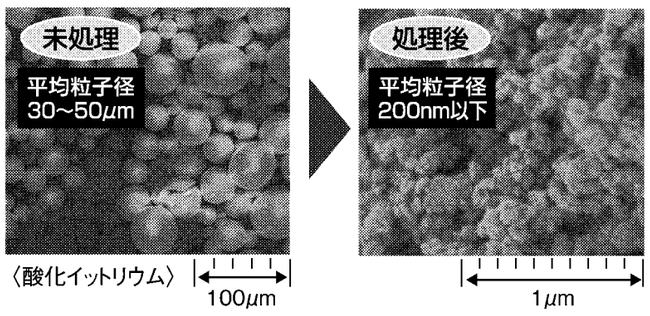
2012年5月、栃木県小山市に、初の研究開発拠点「微粒子技術研究所」を開設した。「新会社設立10周年のシンボル的存在」（芦澤社長）となる研究所を構えたのには理由がある。

ビーズミルが対象物を粉砕・分散する最適条件は、まだ理論的に解明されていない点も多く、ベテランの経験値に頼る部分も少なくない。ナノテク分野へと拡大する市場に挑戦する若手技術者の育成も重要である。基礎研究や社員教育は、目先の利益に左右されては満足に進まない。長期的な視点に立ち、自由な発想で研究に打ち込める環境を選んだ。

事業のグローバル化も、視野に入れている。主要納入先である大手メーカーの国際展開が加速する中、販路拡大が次のテーマだ。

「現在、蒸気機関車を作っていないように、ビーズミルもいつの日か時代遅れの機械となるだろう。特に若いエンジニアには、未来を担う事業や製品を生み出し、自社の発展のみならず、人類の進歩と地球環境に貢献していってほしい」と芦澤社長は期待を寄せる。

新会社設立から10年。アシザワ・ファインテックの羅針盤の針は次代に向けられている。



ナノ・ゲッターで微細化した電子材料の例

アシザワ・ファインテック

▷本社所在地＝千葉県習志野市茜浜1の4の2▷電話＝047・453・8111▷事業内容＝微粉砕・分散機の製造販売と受託加工▷創業＝1903年（明36）6月▷営業開始＝2003年（平15）4月▷売上高＝19億8300万円（2012年3月期）▷資本金＝9000万円▷国内拠点＝大阪支店（大阪府豊中市）、微粒子技術研究所（栃木県小山市）

「自立」果たしたこの10年

インタビュー

代表取締役社長
芦澤 直太郎氏（48）

100年先も尊敬される企業に

名実共に生まれ変わったアシザワ・ファインテック。芦澤直太郎社長に「これまでと、これから」を聞いた。

◇　◇

―10年前の新会社設立には「社員をはじめ社長自身、そして会社そのものを『自立』させる」という強い思いが込められていました。

「アシザワの創業100年を機に再出発した。前身のアシザワ時代は創業家による家業の色合いが濃く、いわゆる『ワンマン経営』だった。かつてはそれで良かったのかもしれないが、社員の自主性が薄れ、不動産事業の安定した収益による甘えや危機感の低下があった。当時、四代目として『何ができるか』を自問し、まず自らの意識を『後継者』から『創業者』へと改めた。そして機械メーカーとしてお客さまと社員に本当に喜んでもらえる企業づくりを目指した。装置の不具合でお客さまからクレームが入ることもしばしばだったが、今は違う。会社が『家業から企業』に脱皮したと感じている」

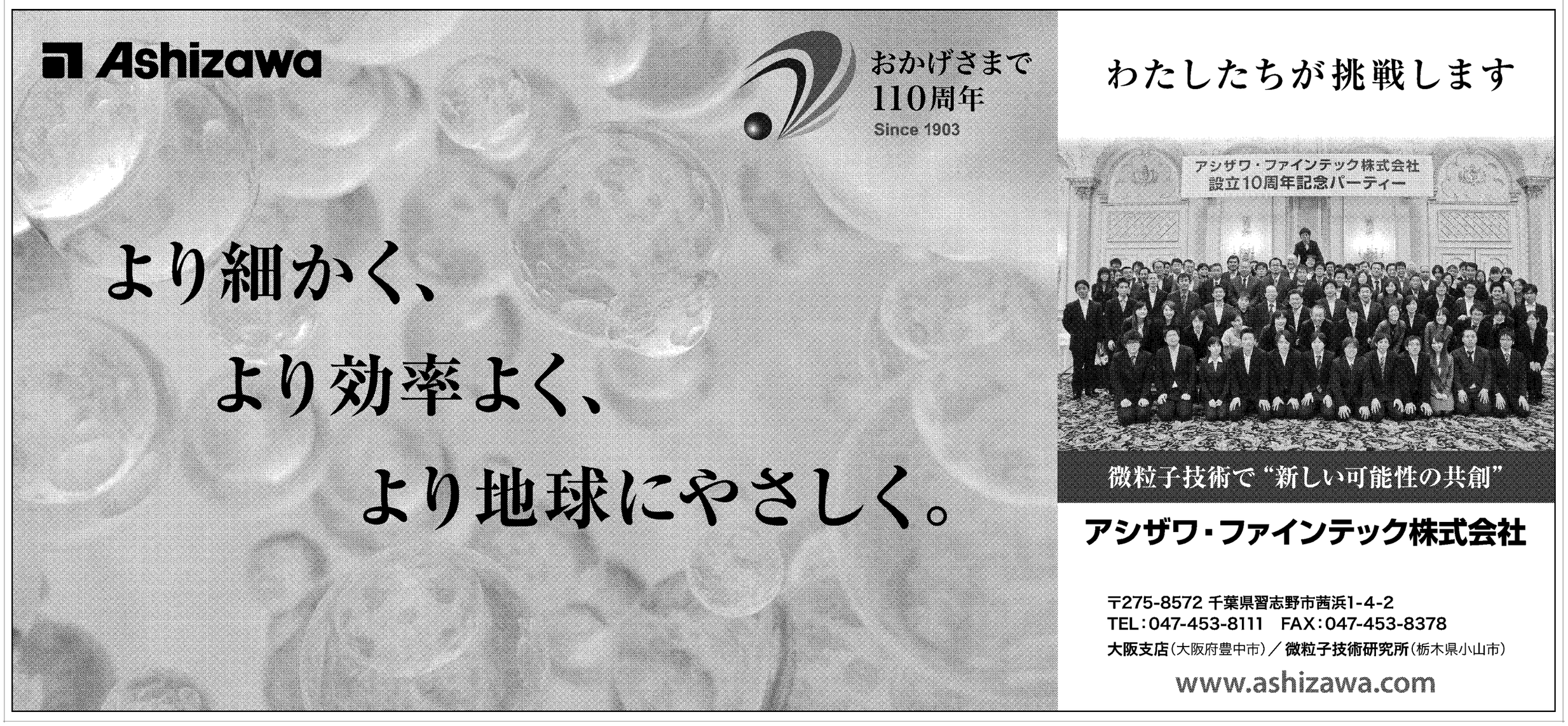
―社員はどのように変わりましたか。

「『社員は会社の財産』と明示し、教育システムや社内改革などに注力した。新会社に移籍した社員も考え方を共有して改革に順応してくれた。今では、社員自らが考え、行動する組織になりつつある。社員が意見を戦わせる風土も養われ、企業としての質が高まっていると感じている」

―社員の新規採用に積極的で事業規模も拡大しています。

「分社当時、約15億円だった売上高は、2013年3月期に約26億円を見込む。社員は110人でほぼ倍になった。その4割が、分社後に入社した20歳代の社員であり、着実に新陳代謝している」

―これからのアシザワ・ファインテックは。

「父親の時代から共通していることであるが、当社が追求すべきテーマは単なる規模の拡大ではなく、製品やお客さまサービスの質の向上だ。会社の将来を担う若手社員には、年月を経て陳腐化してしまう技術に頼るだけでなく、100年先の後輩や社会からも尊敬されるような企業風土を築いてもらいたい」

「私がいなくても事業が滞らない企業になること。それが究極の自立だと思う。その道筋をつけるために私がやるべきことはまだ多い。このほど、会社の10年後、すなわち創業120周年に向けた長期ビジョンを策定し、実行に移した。より多くのお客さまから絶大な信頼をいただける高度な微粒子技術と感動サービスを確立したい」